

法的権力と法律外的権力のあいだ

——古代ローマのパトロキニウムによせて——

吉 村 忠 典

1. 近代の、主として第三世界の社会における私的従属関係の問題、平たく言えば我々が「親分・子分」の関係と呼ぶような人間関係・社会関係の問題が、1960年代ごろから political patronage ないし clientelism の問題として大きく取り上げられている。A. Zuckerman によれば clientelism を最初に概念化し、¹⁾ 実例を記述したのは人類学者であるという。そのような中で、R. Saller は、1960年代のオランダの社会人類学者 Boissevain によるパトロネジの定義づけをローマ史研究に導入し、1982年に《*Personal patronage under the early Empire*》を公にして古代史学界に大きな問題を投げ掛けた。しかし言葉としては、patronatus=patrocinium, clientela は、いずれも言うまでもなく本来ラテン語であり、²⁾ ローマ史の側では政治史・社会史におけるクリエンテラ的重要性は19世紀以来認識されており、とくに20世紀初頭の M. Gelzer, F. Münzer の研究以来、この問題はローマ史研究の中心問題の一つになってきたと言ってよい。³⁾ 否、むしろ最近では、クリエンテラ=パトロネジの概念がローマ史研究において、第二次大戦以前から既に「濫用」されてきた、という批判すら出ている程である。一体ローマ帝国は、その広大な全体を見渡す時、極めて偏った史料によって僅かに伝えられた多くの社会を含む、限りなく多様な諸社会の総体であるから、ローマ帝国史の研究に人類学的な要素が加わる事は避けられないが、人類学のパトロネジ概念は古代ローマ人の言うパトロキニウム概念と同じではない。従って史料に patronus が出てきても、それが人類学者の言う「パトロン」であると言う保証はなく、史料に servus (奴隷)

とあるものが「クライアント」である可能性もありうる。研究者の態度としては、この概念と古代ローマにおける *patrocinium* とを区別しておく必要がある⁴⁾である。

さて Saller は、ローマ共和時代末期・帝政時代初期の文学史料において、*patronus* という言葉が——僅かの例外を除いて——次の3種類に限ってしか用いられていない事を指摘している⁵⁾。

- ① 法廷弁護人と被弁護人との関係。
- ② ローマと外国の共同体との関係。
- ③ 解放奴隷と旧主人との関係。

しかるに Saller は、まさに史料に *patrocinium* として現れないもの（例えばローマ貴族の取り巻き連中、乾児）を「パトロネジ」概念のもとに研究しようとするが、我々がローマ的な *patrocinium* を考える上には、まさに史料において *patronus* と呼ばれるものを中心に据えて、そこから出発してこの問題を考えるのが順当ではないであろうか。

私は、②についてこれまで若干の研究成果を発表してきたが、③については——本稿の後半で述べる点以外には——差当り言うべきものを持たないし、①はローマ法の分野にわたり、諸先人の研究成果を消化して新しい観点を提示する事は私の能力を遙かに超えるので、本稿では、私自身のこれまでの研究の線に沿って、人類学的なパトロネジとローマ時代のパトロキニウムとの、一つの重要な差異と思われる点について、私見を述べたい。

2. まず、極めて具体的な一つの事例を取り上げるところから論を起こしたい。

前70年代、ローマ勢力下のシラクサに、Heraclius という老貴族がいた（以下、固有名詞はラテン形で表す）。彼はウェレス (C. Verres) というローマの高官が前73年にシチリア総督として着任する以前に、親戚から莫大な遺産を相続し、法的手続きも済ませて、益々富裕になっていた。ウェレスが着任すると、Heraclius に敵対的なシラクサ貴族数名が、ウェレスをそそのかし、その権力を借りて Heraclius の相続財産を奪う計画を立てた。その際、彼等はウェレ

スに、Heraclius について、「あいつは、Marcellus 家の者以外に、(他人を介さず) 自分の権利として訴える (adire aut appellare) 事の出来る patronus を持っていない。(だから迫害しても心配はない)」(Cic. Verr. II 36⁶)、と言う。ウェレスはこの貴族たちの誘いに乗って Heraclius を不当に裁判にかけ、その遺産を奪うことに成功した。

ウェレスはこの場合、何故に Marcelli の勢力を無視できたのであろうか。更に、ウェレスはシラクサで慣例の「マルケッルス祭 (Marcellia)」を廃止し、「ウェレス祭 (Verria)」をもってこれに代えようとしたばかりでなく (II 50f. 114. 154. IV 151), C. Marcellus (前79年のシチリアの総督) の騎馬像に Tyndaris の高官 Sopater を縛りつけたと言うし (IV 86), この Marcellus の後見下にある某 Lilybaeum 住民から金品を捲きあげたとも言う (IV 37)。恐らく Marcelli は、この時期に、ローマ第一級の勢力ではなかった。前79年のシチリア総督だった C. Marcellus はコンスルにはならなかったし、彼の弟 (Münzer, *RE* 3, 2760, Nr. 227) は按察官格もしくは法務官格であった。M. Marcellus Aeserninus (Münzer, *RE* 3, 2770, Nr. 231) は patronus Siciliae であるが、ウェレスとある種の信頼関係にあった (IV 91)。その甥 Cn. Cornelius Lentulus Marcellinus⁷⁾のみが一定の役割を果たしているが (II 103 patronus Siciliae. IV 53. div. in Caec. 13. cf. Ps.-Ascon. 190 Stangl), 彼はようやく前60年に法務官となる人で、ウェレス事件時代にはまだ30歳前後だったと思われる。然し、Claudii Marcelli は、プレブス身分とは言え、パトリキの Claudii と肩を並べ得るノビレスの家系で、ウェレス時代にも、若いながらも上記のような人材を擁していた。従ってウェレスは、Metelli 勢力の支持と自己の財力を武器に、Marcelli の相対的な劣勢に乗じて、言わば「きわどい」試みをしていた事になる。それは何の試みであろうか。

キケロは、上記の Tyndaris の高官 Sopater の受難に関して、次のように言う (IV 89~90: 意訳): 「一体, patronus とは clientes atque hospites に助けを齎すものなのか, 災禍を齎すものなのか。お前 (ウェレス) は自分の力 (vis) に対して patroni の援助は無である事を示したかったのか。だが, 離れた所にいる優れた者の patrocinium よりも, 目の前にいる悪しき総督の im-

perium の方が力 (vis) が強い事は誰にも分かっている。お前は、自分の insolentia, superbia, contumacia を誇示して、そんな次元の低い自己顕示によって自分が Marcelli に代る patronus である事を証明したかったに違いない。かくて今やシチリアの patronus は Marcelli ではなくてお前自身になったと言いたいのだろうが、シチリアというこの輝かしい属州の clientela を、由緒ある patroni たる Marcelli から奪い去るために、お前には、どれだけの virtus と dignitas があると考えているのか。お前は、その nequitia, stultitia, inertia をもってして、たった一人の最も卑しいシチリア人の clientela すら維持できるものではない」。

いずれにせよ、ウェレスが Marcellia を Verria に代えようとした事、C. Marcellus を侮辱する態度をとった事、シチリア総督の駐在地であるシラクサ市の元老院はじめ到る所 (II 145. 154 locis omnibus. IV 138f.), その他シチリアの多くの都市、更にローマ市内 (II 114. 145) にまで自己ないし自己父子の像を飾らせた事、そして何よりもシラクサで「シチリア全島の patronus」、 「(シチリア全島の) 救い主 (Σωτήρ)」と言う銘文を掲げさせた事 (II 154) などは、ウェレスが Marcelli に代る新たなシチリアの patronus になろうとした野心を有した事を示している。

但し、キケロのこの演説の中で、シチリア人がウェレスの clientes とされるのは2回だけで、しかも皮肉な調子で語られる (II 114. IV 140)。然しキケロ自身も、前75年にシチリアの財務官を務めた時からシチリア人の clientes を持った筈であるが、「ウェレス弾劾論」の中では一度もこの言葉を用いず、例えば Thermae の人 Sthenius について、「Sthenius は私の amicus であり、hospes であって、私は財務官を務めた時から彼が非常に気に入り、最高の評価を与えたものだ、等々」 (II 117) と言い (cf. II 118. IV 32. V 20)、後年になっても、例えば Halaesa の某有力家族について (fam. XIII 32 前46/45年頃)、「§ 1 M. Archagathus と C. Philo とは Clodius 姓の者で、hospitium と familiaritas によって私とは非常に近い関係にある。§ 2 この家とこの二人の人物は、vetustas, officia, benevolentia によって私と非常に強く結び付いている」、と言う。凡そキケロがシチリア人を自己の clientes である、と

言う言い方をするのは、全現存作品の中でも極めて稀である。⁹⁾もとよりウェレス統治下のシチリア人に対して、キケロが *patronus* として何等かの役割を果たした事も伝えられない。当時まだ新人で財務官格にすぎなかったキケロは、その任ではなかったのであろうか。

ところで、キケロの「ウェレス弾劾論」を知る者にとって、あの暴虐な悪総督にシチリアの *patronus* になる意志があったとは、想像外の事のように思われるかもしれない。然し、ウェレスによるシチリア人略奪の総額を、キケロは初め1億 *sestertii*、のち4000万 *sestertii* と見積もったが、¹⁰⁾法廷はこれを300万 *sestertii* と評価した(史料は Habermehl, *RE* 8A, 1630)。キケロの見積もりの1割にもならない。¹¹⁾それには理由があるにせよ、この数字はキケロの演説が全面的に裁判官に説得的ではなかった事を象徴しているかもしれない。我々は、弾劾者としてレトリックの粋を尽くすキケロの演説を史料として客観的に批判する所から出発しなければならない。そのため、ウェレスがシチリア総督の任務についた時点での彼の姿勢をうかがわせるものとして、彼が統治の最初に「十分の一税」に関して出したと考えられる告示を取り上げてみよう。

3. キケロは、前70年9月下旬から10月頃の法廷演説と想定された文章の中で、この二つの告示を、次のような順序で紹介し、¹²⁾論評する。

① 彼は先ず III 25~26 (cf. IV 70) で、告示の内容を全く知らず、言わば白紙の状態にあった聞き手に、「申告に関する告示」EDICTUM DE PROFESSIONE と題する告示のあった事を知らせ、その中に「*arator* (農業経営者) は *decumanus* (十分の一税徴収人) が告知した額の *decuma* (十分の一税) を納入しなければならない」、という規定(下記の I—c)があった事を告げる。冒頭に¹³⁾「*Primum edictum, iudices, audite praeclarum*」とあるから、これは EDICTUM DE PROFESSIONE そのものを指すのであって、その中の一つの規定である I—c が最初の規定であった、という事にはならない(下記⑨を参照。但しキケロは聞き手に、この規定が *edictum* の冒頭にあったかのような錯覚を与えようとしている)。そして彼はこれに、次のような詭弁で説明を加える。「これでは *arator* は *decumanus* の恣意のままに搾取される事になるではない

か。無茶な告示だ」。ここでウェレスは、キケロが該当告示の全文 (totum : 単数) を朗読していない、自分に都合の悪い所を略して朗読した、と抗議する。キケロはこれに答える。「では何を略したのか。シチリア人の事を配慮したかに見える次の告示か。」

② そこでキケロは (Ⅲ 26~33. cf. IV 70) 聞き手に、「8倍額賠償裁判に関する告示」EDICTUM DE IUDICIO IN OCTUPLUM と題する告示の存在を知らせ、その中の、「decumanus が正当と認められる以上の decuma を取り立てた時、arator は彼から8倍額の賠償を請求する事が出来る」という規定 (下記のⅡ-a) を朗読させて、次のように批判する。「然し、イ・これでは、arator を法廷に行かせるために、労働の現場から引き離す事になる。ロ・decumanus が持ち去った後に arator が訴えるのはおかしい。徴収する前に decumani の側から納入拒否者を告発すべきだ。シチリア以外の所では、decumanus は decuma を pignoris capio によって請求するが、法廷の決定までは現物を持ち去らない。ハ・この請求を審査する法廷は、ウェレスの腹心の者を陪審員とする不公正な法廷である。ニ・ウェレスの在任中、このようにして decumanus が8倍額賠償を命じられた例はない。しかも、ウェレスは一見、arator に対して decumanus に対してよりも穏和であったかのようにみえる。即ち次の告示である」。

③ そして (Ⅲ 34. 70), 「decumanus は故意に納入を怠った arator から4倍額の賠償を請求する事が出来る」という趣旨の規定 (下記のⅡ-b) があった事を紹介し、ここでは8倍に対して4倍になっているから、賠償額は decumanus の場合の方が厳しい、という事を一応認める。この規定は、②と同じ「8倍額賠償裁判に関する告示」EDICTUM DE IUDICIO IN OCTUPLUM の一部である (34「その告示の中に [in edicto]」: ラテン語の用法としては、これを定冠詞的に解すべきである)。だがキケロは甘くない。「然し、ウェレスは同時に次の告示も出しているではないか」。

④ そして、次の規定を引用する (Ⅲ 34. 70): 「シチリアの諸ポリスの政務官は、decumanus が納入の義務ありと告知した額の decuma を、各 arator から徴収しなければならない」(下記のⅠ-d)。この規定は、裁判を扱った「8

倍額賠償裁判に関する告示」よりも、「申告に関する告示」EDICTUM DE PROFESSIONE の一部と考えるのが自然であろう（今やウェレスが二つの告示の内容を、全く恣意的に「つぎはぎ」している事は明らかである）。この難解な規定に関しては、木庭顕（5）、註284、286、302を参照。この規定に対し、キケロは次のように言う。「これでは decumanus が個々の arator を《4倍額賠償の法廷》に引き出す余地がないではないか。ポリスの政務官が間に入るのだから、この法廷の存在そのものが無意味である」。更に、――

⑤ キケロは次の規定を引用する（Ⅲ 35.70）：「arator と decumanus との係争において、当事者の一方が望む時は、総督の任命する陪審員がこれを裁く（si uter volet, recuperatores dabo）」（下記のⅡ－c）。これは当然②と同じ「8倍額賠償裁判に関する告示」の一部と考えてよいであろう。キケロは、この規定に対して言う。イ・上述の事から考えて、この種の裁判は存在し得ない事になる。ロ・「一方が望む時」とは、事実上「decumanus が望む時」の意味にしかない。ウェレスの編成する陪審法廷の性質から見て、arator がそれを望む事はある得ないからである。ここで、キケロは突然、前71年の告示（Ⅲ 51）を3点引用する（Ⅲ 36～38.51）：

⑥ 「arator と decumanus との間に（納入額について）約定が成立するまでは、arator は穀物を打穀場から持ち去ってはならない」。⑦ 「すべての arator は8月1日までに¹⁴⁾ decuma を港に運ばなければならない」。⑧ 「arator は decumanus の指定する法廷（iudicium de professione jugerum: 39.55）に出頭する事を、出頭担保人によって保証しなければならない」。この、前71年の告示⑧によれば、arator は decumanus の恣意のままにシチリアの東端から西端までも出頭しなければならず、arator は事実上、法廷で争えなくなる。従って decumanus は（冤罪で）訴えるぞ、と脅迫して金を奪う事も出来る。このような脅迫のいい材料になったものとして、キケロは再び前73年の告示に戻って次の規定を紹介する。

⑨ 「arator は自己の作付面積を申告しなければならない」（下記のⅠ－a）（Ⅲ 38～39.53.54.55.70.112.129）。これら明らかに「申告に関する告示」の冒頭に置かれたものであり、しかもあらゆる規定の前提になっている。この条項が最

初にあるから「告示Ⅰ」は全体として EDICTUM DE PROFESSIONE JUGERUM と呼ばれるのであろう。それは、Ⅱ—aが「告示Ⅱ」の最初にあるからこの告示が EDICTUM DE IUDICIO IN OCTUPLUM と呼ばれるのに対応する。又、Ⅲ 113では In Leontino *jugerum subscriptio ac professio* non est plus xxx とあるから、Ⅲ 120¹⁵⁾と考虑併せると、*subscriptio* の規定もⅠ—aに含まれる。然しキケロは言う。「これによって *decumanus* は、虚偽の申告、形式不備の申告、という言いがかりをつけて *arator* を脅迫し、金品を捲き上げる事が出来る（しかる後、その申告を無視した法外な査定をする）。明確な罰則規定がないため、ある *arator* は全生産高を支払うよう命ぜられ、又ある *arator* は鞭打たれる¹⁶⁾」。

⑩ なお、Ⅲ 129に一つのエピソードが紹介されている。それによれば、Helorus の貴族、Tyracinus は、全財産をもってしても支払いきれない程の額が、ウェレスの告示に従って *decumanus* から告知されたため、首を吊って自殺した、と言う。私はこれからⅠ—bの存在を想定した（即ち、Ⅲ 25 *quantum decumanus edidisset aratorem sibi decumae dare oportere etc.* 28 *qui [arator], cum tantum dederit decumano quantum ille deberi dixerit.* 34. 70 *quantum Apronius edidisset deberi, tantum ex edicto dandum erat* などの *dicere, edere* を独立の項目にした）。

以上、Ⅰ—bのみ私の想定であるが、他はすべてウェレスの告示としてキケロが引用しているものであり、これらを整合的に復原すると、次のようになる。

I 申告に関する告示 (*edictum de professione jugerum*)

- a. *arator* は自己の作付面積を申告・登録しなければならない。
- b. *decumanus* は (*arator* の申告を尊重して) *decuma* の額を確定し、これを *arator* に告知しなければならない。
- c. *arator* は *decumanus* が告知した額の *decuma* を納入しなければならない。
- d. シチリア諸ポリスの政務官は、*decumanus* が納入の義務ありと告知した額の *decuma* を各 *arator* から徴収しなければならない。

II 8倍額賠償裁判に関する告示 (edictum de iudicio in octuplum)

a. decumanus が正当と認められる以上の decuma を取り立てた時、
arator は彼から8倍額の賠償を請求することができる。

b. decumanus は故意に納入を怠った arator から4倍額の賠償を請求することができる。

c. arator と decumanus との係争において、当事者の一方が望む時は、総督の任命する陪審員がこれを裁く。

さて、キケロはこれを、①I—c、②II—a、③II—b、④I—d、⑤II—c、⑥前71年の告示3点、⑦I—a、の順で紹介するが、以上の復原と矛盾する個所が「ウェレス弾劾論」にないとすれば、これを一つの可能性として考える事は許されよう。これが lex Hieronica をどれだけ踏襲しているかは別として、我々はここに、ウェレスの真実と、キケロのレトリックの真姿とを具さに知る事が出来る。キケロは自己の論理を明示するために全告示を分解して提示したにせよ、告示の全体像を前もって提示する事をしないのは、誠実な批評者ならば許される事ではない。特にI—cからこのような形で論じ始めるのは、我々から見れば公正な批判者の態度ではない。それにしても、前73年のウェレスの十分の一税に関する告示は極めて穏当なものであり、ウェレスが真面目な態度で総督としての活動を開始した事を示している。少なくともII—a、II—b、そして恐らくII—cも、III 27によればウェレスの新機軸であったと言う。ウェレスは、可成り arator に有利な告示を発布した事になる。Leon-tini, Mutyca, Herbita, Agyrium の4市の aratores の総数は、前73年に773名、前71年に318名であったと言う(III 120)。59%の減少である。然しキケロは、aratores の大部分(maximus numerus aratorum)が逃亡したため(III 128)、前71年の後半に、全シチリアを通じて残存した aratores は前73年の1割にも満たないと言う(III 121)。それならば59%より遙かに減少率の多い所があった筈であるが、キケロはどうしてその例を挙げないのか。恐らく「1割にも満たない」と言うのは非常な誇張である。しかも、キケロが「ウェレスの犠牲」として個別的に取り上げているのは、3年間にわたって全シチリアで数十件に過ぎない。ウェレスが特に悪質な aratores を摘発した可能性もある。ローマ時

代の「大土地所有者」の *potentia* はよく知られている。キケロの数字が正しいとすると、*aratores* の減少は確かに著しいものがあるが、それは、ウェレスの厳正な態度の前に身勝手な権力者（上記4市を通じて数百名）が経営を放棄した事を示すかもしれないし、上記の4市では最後に残った318名が、キケロの言う「勤勉な小 *aratores*」(III 27) の主力だったかも知れない。いずれにせよ、キケロが「悪総督」として描いたウェレスが、実はシチリア人の *patronus* であろうとする者であったとしても、意外な事ではない。

4. さて、総督としてのウェレスは、国家から与えられた部下（財務官、総督付派遣官 [*legati*]=副官）を余り使わず、むしろ解放奴隷など、私的な腹心を使う。「お前（ウェレス）は3年間シチリアの *provincia* を管轄した。お前の *gener*（実は妻の兄弟 T. Vettius）…は1年間だけお前と一緒にだった。お前の副官…は第1年目にお前から去ってしまった。ただ一人残った副官の P. Tadius も、余り長くはお前と一緒にいなかった（II 49）」。「正式の部下として知られているのは次の通りである。

財務官—— Q. Caecilius Niger, M. Postumius, Q. Caesetius, T. Vettius.

副官—— P. Tadius, P. Cervius.

Q. Caecilius Niger 彼はウェレスの財務官になった当初、ウェレスと対立したが (Div. in Caec. 55~58), やがて和解した (29 in gratiam redire. 58)。彼はウェレス裁判において、訴追者候補として、キケロにとっては追い落とすべきライバルであったから、この演説はそのつもりで読まなければならない。事実、Caecilius はウェレスの財務官という重任にあったが故に、キケロはウェレスの不当な穀物徴収に関連して Caecilius の責任を総論的には問う事が出来た (30~34)。然し、Div. in Caec. の後、「ウェレス弾劾論」の巻頭から巻末に到るまで、ウェレスの「犯罪」が詳細に論じられる中で、Caecilius の名は一度も現れない。「ウェレス弾劾論」において、Caecilius は完全に不在である。

M. Postumius 彼に関しては、シラクサで陪審員を抽籤で選ばせる、という職務上の行為について、一カ所触れられているのみである (II 44)。

Q. Caesetius, P. Tadius 財務官の Caesetius と副官の Tadius (II 49 qui ... non ita tecum multum fuit) には、10隻から成る艦隊の指揮が委ねられていたが (V 63), ウェレスは程なくこの両名に代えて、シラクサの貴族, Cleomenes を艦隊司令長官に任命したと思われる。何故なら、この両名の艦隊は、シラクサ北方の Megaris の沖を遊弋中に海賊船を拿捕するが (V 63), ウェレスは捕らえられた海賊を助命し、代りにローマ市民を処刑した (V 64~79. cf. I 9. 12)。この処刑の現場を、Heraclea が提供した軍艦の艦長 Furius が見ている (V 113) が、彼は続いて Cleomenes の指揮下に艦隊の一員となる (V 112. 129. et al.)。これから判断すると、この艦長は、故郷を離れて Caesetius, Tadius のもとで勤務し、シラクサに上陸してローマ市民処刑の現場を目撃し、再び Cleomenes の指揮下に海上勤務した、と解するのが自然のように思われる。従って、Caesetius, Tadius は罷免され、その後をうけてシラクサ人 Cleomenes が艦隊 (7隻から成る) の長官になったと想像される。Cleomenes はこの艦隊をウェレスの副官から受け継いだという記述があるが (V 82), この副官は Tadius であろう。因みに、こう見ると Tyndaris の軍艦の艦長 Aristeus も同様の経験をしたと考えられるが、彼がウェレスによって武勲のために corona を授けられた (V 110) と言うのは、かの海賊船拿捕の時の事であった可能性もある。

T. Vettius 彼についてキケロは、彼が1年間 (II 49) ウェレスの財務官であったにも拘らず重要な会議に参加させられなかった、と言う事実と、彼がウェレスの妻の兄弟であった、という事実しか伝えていない (III 168. V 114)。なお、彼の兄弟の P. Vettius Chilo は、ウェレスによって恩恵を蒙った徴税請負組合の幹部役員 (magister) であったが、ウェレスの不法行為に対しては極めて厳しい態度をとっている (III 166~168)。

P. Cervius 彼についてもキケロは、彼が副官であったにも拘らず、T. Vettius と同様に重要な会議に呼ばれなかった事、更に前70年のウェレス裁判で、ウェレスに忌避されて陪審員になれなかった事、をあげている (V 114)。

ウェレス在任の3年間について、財務官と副官の名は、あの詳細なキケロの記録の中には、以上の6人しか現れず、しかも、いずれも殆ど総督の補佐役と

しての役割を与えられず、むしろそれを拒否されているのに我々は驚く。

上記の T. Vettius と P. Cervius が呼ばれなかったのは、捕虜になった海賊の扱いに関する会議であった。ウェレスはこれを通常の総督と同様に「顧問会の意見によって」(de consilii sententia) 行なったが (V 114), 顧問会に必ず召集さるべき財務官、副官は召集されず、キケロの言うところでは、「盗賊ども、つまりお前の comites の意見によって」事が決定された。そして、ウェレスの comites とは何か。それは、「お前のあの選り抜きの comites がお前の勢力集団 (manus) であった。scribae, accensi, medici, haruspices, praecones, これがお前の勢力集団であった。それぞれが何らかの cognatio, affinitas, necessitudo によってお前に近ければ近いほど、それだけ一層お前の manus だと考えられた。お前の cohors はシチリアに、反乱奴隷百個大隊 (cohortes) にまさる災難をもたらしたが (cf. Ps.-Ascon. 262), それが文句なくお前の cohors であった」(II 27. 彼の cohors は更に II 46. III 28. 54 et al. 70 cohortes praetoria)。小スキピオ以来、総督は cohors praetoria を持った事が知られているが、¹⁷⁾キケロはその代りにウェレスの下級属僚や腹心から成る cohors を想定し、これを反乱奴隷の部隊 (cohors) になぞらえてしまうのである。このような集団が属州総督の cohors praetoria や「顧問会」であった筈はない。他方、V 102~103で、海軍全滅への対策に苦慮するウェレスに助言を与えた amici=consilarii (顧問会員) は何者であろうか。やはり、ここには然るべき「顧問会」があったように思われる。II 70~75では、Tyndaris の Sopater が裁判された時、ウェレスは初め「シラクサ在住ローマ市民団中の立派な人々を顧問会に有した」というが、彼等はウェレスを見捨ててしまい、ウェレスは「scriba, medicus, haruspex の意見」によって判決を下したと言う。我々はキケロのレトリックによる事実隠蔽にも拘らず、ウェレスが正規の「顧問会」の意見を徴した、という事実を、完全に否定し去る事は出来ない。

然し、ウェレスが重視したのは、次の3人の解放奴隷であり、キケロの解放奴隷 Tiro, ポンペイウスの解放奴隷デメトリオスなどに比すべき重要な役割を果たす。即ち、Q・アプロニウスの活動は十分の一税の徴収に限られているが、¹⁸⁾この限りではシチリアは「アプロニウスの王国」であったという。¹⁹⁾これよ

り広範囲に使われたのは P. Naevius Turpio であったが (V 108 quem iste in decumis, in rebus capitalibus, in omni calumnia praecursorem habere solebat et emissarium), ウェレスにとって最も重要な腹心は Timarchides であった。II 136「(奴隷反乱のリーダー) Athenio は、いかなる oppidum も占領しなかったが、… Timarchides は凡ゆる oppida で3年間にわたって君臨した、と言う事を知って頂きたい。ローマ人の最も古くからの、最も親しい関係にある盟邦諸国民の子供たち、主婦たち、bona, fortunae が、すべて Timarchides の権力の下におかれていた。…彼はシチリアのすべての civitates に、金品を受け取って censores を分配し、ウェレスが総督であった間は、(各 civitas で) 選挙など、見せ掛けのためにすら行なわれなかった」。cf. 133f. シチリア諸ポリスの censores は彼の意のままに任命されたと言うのがある程度でも真実であれば、timocratic な世界で彼の果たした役割は重大な意味を持つ (cf. II 131)。しかも、Agrigentum や Heraclea では住民の古い層と新しい層との勢力のバランスが元老院の構成に直接に反映されており、ウェレスが (Timarchides と共に) この状況に介入した事 (II 123~125. 131~133) は、現地の社会関係に重大な影響を持った筈である。

シチリアの patronus となる為には、またシチリアの、特にシラクサの貴族を clientes にしなければならなかったであろう。果たしてシラクサには、ウェレスと固く結び付いた貴族がいた。然し、キケロはこれを完全にカリカチュア化する。中でも中心的なのは、ウェレスの「盗みと不正行為と妻を共にする仲間」(II 51. IV 139 illius adiutores improbitatis, socii furtorum, conscii flagitiorum) とされる Aeschrio, Cleomenes, Theomnastus, Dionysodorus の4人の貴族であり、他に、²⁰⁾身分は高いとは思われないがウェレスの amicus と呼ばれる Docimus (III 78f. 83) がいる。²¹⁾「妻を共にする仲間」と言うのは、Aeschrio がその妻 Pipa を、Cleomenes がその妻 Nice をウェレスの宴席に侍らせながら彼の歓心を得ようとしたからである (V 30f. 81f. 137. convivia muliebria: 31. 81. cf. act. pr. 14+ Ps.-Ascon. 209)。Docimus の妻 Tertia もウェレスの妾であったと言う (特にキケロの悪意ある記述: III 79を参照)。ウェレスは Cleomenes を海軍の司令官にした。キケロはこれを、Cleomenes を妻か

ら引き離すためのウェレスの策略と解しているが (V 82. 137), 属州民の軍事的な利用については、共和時代末期には例が多い²²⁾。

5. では、ウェレスは「公的」な枠組みの外部で行動しようとする志向を強くもっていたのであろうか。然し、ウェレスの最大の武器の一つは、正統な手続きによって賦与された *imperium* (命令権) であった。「十分の一税国」*Thermae* の人 *Sthenius* はウェレスと *hospes et familiaris* (III 18. cf. II 83. 91. 95. 110 *amicus*. 115. 116. V 109) として交際していた時代に、秘蔵の美術品コレクションをウェレスに奪われたが、「総督の不法は黙ったまま、*hospes* の不法は欣然として堪えなければならない、と考えていた」(II 84) と言われる。「条約締結国」*Messana* の人 *Heius* も同様の運命に会った時、「総督の言う事には従う他はなかった」(IV 27) と言う。いずれも総督の *imperium* を頭においての発言である。「自由免税国」*Halicyae* の最高の富豪に数えられた (II 68) *Sopater* も、シチリア人なるが故にローマ人より権利が劣る (*homo ... et Siculus et reus, hoc est et iure iniquo et tempore adverso*) という状況で空しく抵抗しようとする (II 70)。上にも引用したように、「離れた所にいる優れた者の *patrocinium* よりも、目の前にいる悪しき総督の *imperium* の方が力が強い事は誰にも分かっている」(IV 89)。ウェレスの手管は *per vim ... occulte ... imperio ... gratia ... pretio* (II 88) であり、*vi minis imperio iniuriaque* (III 73) であり、*vi metu imperio fascibus* (IV 14) であり、*petere ... minari ... spem ... metum ostendere* (IV 75) であった。ウェレスをして自らをシチリアの王と感ぜしめたのは (III 77 *se regem Siculorum esse dicebat*), これらのすべての方法の結合によってであった。例えば、ある都市の美術品を略奪しようとする場合でも、*Thermae* の場合には貴族 *Sthenius* を介し (II 85. IV 51~53の *Haluntium* の場合も同様、IV 50の *Centuripa* および *Agyrium* の場合も同様かもしれぬ), *Catina* (IV 50 *ei* [同市の長官に] *palam imperat*), *Segesta* (IV 75~78), *Tyndaris* (IV 84~92) の場合には公的機関を経て公然と実行する。又、多くのシチリア人がウェレスの総督としての「(再) 審理」(*cognitio*)²³⁾ で不当に被害を蒙った例は、「ウェレス弾劾論 II」に数多く見られる。ウェレ

スは、「もし誤審があつた場合には、総督がこれを（再）審理し、（再）審理した後、処罰を行なう」と言う告示すら出している（II 33）。即ち、現地人同士の現地人裁判官による訴訟事件に、総督としての職権によって介入する、と言う趣旨である（cf. II 67）。「誤審」か否かは、ウェレス自身が独断で決定するわけである。

ところで、私は前2世紀を扱ったある論文で、²⁴⁾ 当時のローマが、全地中海世界の諸国——シリア王国、エジプト王国に到るまで——に対して《non-technical》な意味での imperium を行使し、諸国の側でもローマに対して《non-technical》²⁵⁾ な意味で「命令を実行する」意志を表明した事を論じた。「元老院が imperare する」という例が史料に度々みられるし、又、外国に籍を有するものに対してローマの政務官（及び政務官代理官）が imperare する例も数多く見られる。いずれの場合にも「命令の実行」がこれに対応する。他方、私は別の論文で、²⁶⁾ 前1世紀のシチリアの「条約締結国」について、歴代のシチリア総督が「imperium を帯びて」そこを訪れ（IV 7）、それが、総督が imperium をもって管轄する provincia の内部にある（V 46）、とされており、従って「条約締結国」の国民が（明言はしなかったが implicit に）《technical》な意味での imperium の下にあった事を論じた。上記の例も、この事を示している。

そうだとすると、imperium が《technical》であるか《non-technical》であるかの区別は不分明になる。なぜなら、「自由国」、「条約締結国」の国民は、シリア王、エジプト王と全く同様にローマの自由な amici であったからである。ローマの imperium 保持者が、自己の管轄下にあるローマ市民（例えばローマ兵士）に対して行使する imperium と、彼の管轄下にある属州の「自由国」、「条約締結国」の国民に対して行使する imperium と、シリア王、エジプト王に対して行使する imperium と、どこが違うのであろうか。《technical》な imperium と《non-technical》な imperium との境目はどこにあるのであろうか。古典的な理論が正確に捉えているのは、第一の場合だけではないであろうか。socii は「十分の一税国」の市民を含めて広義では「自由」である。然し、《technical》な imperium が外国籍の者に対してどのように及ぶかは、古典的な理論では突き詰めて考えられていないし、およそ、imperium を

《technical》なものと《non-technical》なものとの区別すべき基準とその妥当性を論じた論文を、私は寡聞にして知らない。

ここで Augustus の imperium の問題に深く立ち入る必要はないが、彼の imperium は、それが何時、いかなる名称と内容を持ったにせよ、「全帝国の兵士に対する排他的な支配権²⁷⁾」および全属州もしくは皇帝領属州に対する軍事的および civil な支配権力²⁸⁾である、そして「proconsul の支配の下にない同盟諸都市」(Mommsen, II 856), 「総督の管理下にない、属州の自由な諸都市」(ibid. II 857) は Augustus の imperium の下にはない、と言う以外の観点は、管見の限り研究史上見られないようである。従って、imperium の対象は、本来的にはローマ市民であると考えられている²⁹⁾。

imperium 保持者は、差当り coercitio (懲戒) 権を有する。然し、ローマの amici たるエジプト王やシリア王の国民に対してまで彼が coercitio 「権」を持つとは考えられない。例えば Th. Mommsen は imperium 保持者の coercitio 権を論ずる中で (ibid. I 137f.), その対象となる違反者の身分は問題にならない、として、次のように述べる (S. 139)。「自由人も奴隷も、男も女も、ローマ市民も非ローマ市民も、斉しく服従しなければならず、違反した場合には斉しく罰せられる。但しそれは、問題の行為がローマの命令権の及ぶ範囲 (Kreis) に属し、例えば国際間の条約などによって例外規定が設けられていない場合についてである」。そして、その Anm. 1 で、この Kreis は、史料の不完全さのため、又、ローマの勢力拡大によって Rechtsnormen と Übergriffe の区別が困難になったため、明確にし難い、socii の領域内で生じた事は、一般にローマ当局の関知する所ではない、と述べる (この最後の一句は事実³⁰⁾に反する。ローマによる socii 諸国への内政干渉の例は極めて多い³¹⁾)。

これに対しては、既に W. Kunkel が1962年の著書で、共和時代に coercitio 「権」なるものが国法上の制度として存在したとする根拠が全くない事を指摘しているが、なおも De Martino は1972年に technical term としての coercitio³²⁾ について論じている。カエサルは「ガリア戦記」において、Haedui 族の有力者 Dumnorix の反ローマ的な態度について情報を得ると、「Dumnorix を coercere し deterrere する決心をした」(b. G. V 7, 1) という。又、アレ

クサンドリアにおいて、「もしエジプト王たちに忘恩の振舞いがあったら、守備隊で *coercere* する事が出来る」(b. Alex. 33, 4), という態度を取る。然し、これらが《technical》な *coercitio* か《non-technical》なそれかを論ずるよりも、更に肝腎な点は、キケロもカエサルも、*imperium* が《technical》であるか《non-technical》であるか、という区別を意識していた形跡が全くない、と言う事である。特にキケロとしては、もしウェレスが *imperium* 保持者としての「法的権限」を逸脱したのであるならば、何よりも第一にその点を追求した筈であるが、彼はそのような議論は展開しない。むしろ総督が「自由国」、「条約締結国」に対して *imperium* を行使するのを当然の事としている。ウェレスが Tyndaris というポリスから同市の宝物であるヘルメス像を奪った、という事件を糾弾する中で、キケロは、この一つの犯罪が幾つの *crimina* を構成するであろうか、と考え、*crimen pecuniarum captarum*, *crimen pecu-*³³⁾
latus, *crimen maiestatis* (これは記念物を持ち去った事それ自体を指すにすぎない), *crimen sceleris*, *crimen crudelitatis* を挙げる (IV 88)。しかし、いやしくも一つのポリスの長官に向かって、「お前の国の *religio* が何だ、刑罰が何だ、元老院が何だ」という言葉を吐きつつ (IV 85), このポリスの公的な記念物の搬出・贈与を命令した事 (IV 84: 同市の長官に *imperavit*) それ自体はいかなる *crimen* を構成するとも考えられていない。前170年のコンスル L. Postumius Albinus (Münzer, RE Nr. 41) は、私怨から Praeneste 人に横暴な命令を下した。Livius (XL II 1, 12) はこれに対して、「彼の怒り (*ira*) は正当なもの (*justa*) であるが、政務官としては怒りに任せて行動すべきではなかった」と述べ、続けて、「Praeneste 人の黙従によって、日ごとに一そう酷しい命令 (*graviora in dies imperia*) を出す権利 (*jus*) がローマ政務官に生じてしまった」と言う。故事に詳しい Livius すら *imperium* が《technical》であるか《non-technical》であるかの区別を知らなかったようである。ここで想起されるのは、かの *repetundae* 裁判すら、ローマ勢力下にある非ローマ人がローマの政務官等個人から損害の賠償を請求する、本来的に民事的な性格のものであって、刑事法的なものではなかった、と言う事である。³⁴⁾ W. Kunkel は、共和時代末期に到るまで、ローマ人は *imperium* の概念を、Mommsen が考

えるような厳密な意味では用いなかった、と論じている。³⁵⁾

ウェレスにとってシチリア諸国とエジプト王を区別するものは、前者が彼の *provincia* の中にあるという点である (拙稿 [1986])。 *provincia* とは、「管轄領域」の意だと解されている。然しそれは、《non-technical》な *imperium* を《technical》な *imperium* に変える魔力を持っているのであろうか。 *provincia* の割当ては、元老院の決議、抽選、当事者同士の話し合いなどで決められるにすぎない。キケロ (Att. VIII 15, 3: 前49年) は、「祖先の遺風により、 *consul* たち自身は凡ての *provinciae* に入る (*adire*) 事が出来る」と言っているが、 *consul* たちがそれらの *provinciae* でどのような権能を持ったかについては触れず、又 *praetores*, *propraetores* にその権利があったかどうかは分からない (Mommsen I 53, 3. II 655, 2. Wesenberg, RE 23 [1957], Sp. 998; 制限がないならば、隣接する二つの *provincia* の総督同士が無制限に干渉し合う事になる)。なお、ウェレスは、イタリアの *Rhegium* に対して *imperium* を行使している (V 47 *imperavit*; *imperio tuo*)。これに対して、《technical》な *imperium* は通常 *lex curiata* によって付与される。然し、*lex curiata* は *imperium* 行使にとって絶対に必要な条件ではない。³⁶⁾ *lex curiata* なき *imperium* の例は前3世紀末から知られており (Mommsen, I 612, 1), *lex curiata* のための *comitia curiata* は共和時代末期には30人の *lictors* に代えられ、帝政時代になると、皇帝の *imperium* が *lex curiata* を必要とした事はもはや確認されない (Mommsen I 613, 2. II 841f.)。その限りでは、*imperium* は共和政中期以後、本来持ったかもしれぬ厳格さを失っている。

キケロは、条約締結国の地位を、「*imperium* による支配と服従の関係、盟邦たる者の存在条件、条約の記憶」 (*ius imperii, condicio sociorum, memoria foederis*, V 50) という矛盾した単語の並列 (仲間であり、契約のパートナー同士である者が、支配する者と服従する者の関係にある) で説明し、これを「条約による権利義務と、ローマの支配下にあるという存在条件」と総括する (loc. cit. 更に, V 59 *merces imperii, auxilii, iuris, consuetudinis*)。又、小アジアの *Lampsakos* (自由国?)³⁷⁾ の市民について、彼等がローマ権力に相対した時、「存在条件としてはローマ国民の盟友であるが、その運命は奴隷のそれであり、その気

持は嘆願者のそれであった」と伝えている (I 81)。キケロはこの「矛盾」に違和感を抱いている形跡はない。

ウェレスは、上記のように、総督在任中に、全シチリアの *patronus* と称した。カエサルがガリア総督であった時、ガリアはキケロによって、カエサルの *tutela* のもとにあると言われた (Cic. prov. cons. 35)。スペイン人の *patronus* であったポンペイウスが前55年以後 (任地に行かなかったにせよ) スペインの総督になった事は周知の通りである。既に前2世紀の初めに、*proconsul* の *Flamininus* は、ギリシア遠征の3年目に、ギリシア人から *σωτήρ* と呼ばれた (Plut. Flamin. 16, 7 : 当時ギリシア人は *πάτρων* という言葉を知らなかった)。更に溯れば、第二次ポエニ戦争時代に、スペイン人やヌミディア王の *patronus* であった小スキピオの例を挙げる事が出来る。およそ、*imperium* 保持者は、敵の *deditio* (無条件降伏) を受け入れた時にその *patronus* になった、と伝えられるから、*imperium* を持つ *patronus* は古くからあった筈である。これらの例では、公職者 (*magistratus* もしくは *Promagistrat*) が同時に *patronus* である。然し、例えばウェレスがシチリアで行なった行為のうち、総督としての *imperium* に基づく「公的」な行為と、そのような *imperium* に基づかない *patronus* としての「私的」な行為と、当時の誰も区別しようとしなかったケースが多かった筈である。そもそも「公的」行為は私人に恩恵を齎す筈であるが、ましてローマの政務官は「事務官」ではない。「機構」が統治するのではなく、実力者である「人間」が統治する (後述参照)。従って、ローマ世界には、*imperium* を持つ *patronus* と、ウェレス時代のシチリア人にとっての *Marcelli* のように *imperium* を持たない *patronus* とがあった事になる。

上述のように、ウェレスは、彼の *provincia* の外部にあるイタリアの *Rhegium* の住民に対して *imperium* を行使した (V 47)。いま仮に、それと同様に、*provincia Africa* の総督がその *provincia* を越えて例えば *Lilybaeum* の住民を苦しめた場合、或は、海賊討伐のために上級命令権を持っていた (II 8. Vell. Pat. II 31, 3) *M. Antonius Creticus* が *Lilybaeum* で不当行為を行なった場合 (それが不可能でない事 : *Div. in Caec.* 55), *Lilybaeum* の住民がシ

ラクサにいるウェレスに助けを求めて成功したならば、ウェレスは、「離れた所にいる」総督であると同時に、「離れた所にいる」patronus になる。Cephaloedium の人 Artemo (Climachias cognomine) は、最高神官の地位を Herodotus と争ったが、ウェレスは暦の操作を強制して (iubet) 選挙の日をずらせ、これによって Artemo が当選した (II 128~130)。ウェレスは Artemo の恩人になったわけである。キケロは続く箇所 (II 131~133) で、ウェレスが各 civitas の censores を自己の判断で (勿論、キケロによれば収賄によって) 任命したと言うが、ウェレスは censores になった人々の恩人になった事になる。いずれにせよ、patronus は「私人」とは限らず、「公人」の patronus がある。この場合、patrocinium は最も有効である。即ち、一方に解放奴隷を置く patrocinium のスペクトルの他方の極で、imperium と patrocinium は合致する。してみると、「離れた所にいる」か「目の前にいる」かは相対的であり、Lilybaeum 人にとって、patronus が Lilybaeum にいるか、シラクサにいるか、ローマにいるかは、50歩100歩の違いにすぎない。ただ、有効さは距離に反比例する。「離れた所」のみならず、「距離」にはさまざまな次元——時間的な次元、血縁関係の次元、等々——がある。ウェレス時代にローマに在った Marcelli は、第二次ポエニ戦争時代の M. Claudius Marcellus から大きな距離で隔てられているが、常にシチリア人との関係を温めてきた。然し Marcelli にも、前述の M. Marcellus Aeserninus のように、シチリア人よりもウェレスに心を寄せる者もあった。

従って、当時の人が、imperium が technical か non-technical かを問わなかったとすると—— imperium に単に「法的」実体のみを見ていたのではないとすると——、patrocinium の最高の形は imperium にある。imperium はその意味で、相手に利をも害をも齎しうる両刃の剣である。patrocinium とて、一方に恩恵を与える事によって、他方に損害を与えうる。しかし、imperium は Urbs に戻った時に失われ、patrocinium はさまざまな「距離」によって稀薄化されて、しかもある場合には、その矛先を他の imperium 保持者に向ける形をとる。

patrocinium は元来「家」の世界にあり、imperium は元来「家」を超えた所

にある。どうして両者が接近したのであろうか。imperium は non-technical なものになった時、「家」の方向に一步を進めたのであろうか。

然し、imperium とは離れた「家」的現象としての patrociniū の側でも、ある意味でこれとパラレルな現象がある事が注目される。その事はたとえば Valerius Maximus の一章から知る事が出来る。

6. Valerius Maximus (1世紀前半) 第5巻・第2章は「感謝の念について」と題されているが、ここには若干の、意味深いエピソードが紹介されている。

§ 4・前217年独裁官 Fabius Cunctator によって敗戦を免れた Minucius は、Fabius を pater と呼び、自己の部下の兵士にも彼を patronus と呼ばせたとする。これには Liv. XXII, 29, 11. 30, 2. Plut. Fab. 13, 6f. 等の傍証³⁸⁾があり、そこでは、Minucius は自己の兵士に、Fabius の兵士を patroni と呼ばせている。

§ 5・Q. Terentius Culleo³⁹⁾は法務官格の家に出た元老院議員であったが、第二次ポエニ戦争の際にカルタゴの捕虜となった。大スキピオは、前201年の戦勝後、カルタゴに彼の身柄を返還させた。Culleo はこの事を非常に感謝し、スキピオがローマで凱旋式を行なった時には、pilleus (解放奴隷の用いる帽子)⁴⁰⁾を着用して式に従った。付言すれば、我々の知っている所では、Culleo は以後その政治生活の最後まで、スキピオの忠実な腹心としての立場を貫いた (Liv. XXX 45, 5)。そればかりでなく、前187年のスキピオの埋葬式に際しても、Culleo は再び pilleus を着用して葬列に加わったと伝えられる (Liv. XXXVIII 55, 2)。

§ 6・前194年に、マケドニア王 Philippos 5世のもとに捕虜になっていたローマ兵で、Flamininus の戦勝によって解放された者2000名が、pilleus を冠して、Flamininus の凱旋式に参加した。これも Liv. XXXIV 52, 12. Plut. Flam. 13, 9. Mor. 197 B によって傍証される。

§ 7・「国家の第一人者」である Q. Caecilius Metellus Pius (cos. 80) は、自己より遙かに格式の低い Q. Calidius (tr. pl. 98. pr. 79) を、前98年に受けた私的恩義のために、公然と「わが一家全員の patronus」(patronus domus et

familiae suae) と呼んだ。これについては、Cic. Planc. 69 に傍証がある。

多読な Valerius Maximus の使用した史料を個々の場合について特定するのは極めて困難であるが、⁴¹⁾ここではむしろ、Valerius Maximus のこの章におけるエピソードの配列の仕方に注意したい。即ち、§ 1～3 で「感謝の念」にまつわる美談が挙げられた後、§ 4 で、恩人が patronus と呼ばれる例が挙げられる。ここでは pater が不可欠な並列語として現れる。続いて § 5～6 では、恩義を受けた者が、pilleus を冠る事により狭義の clientes の姿をして謝恩の念を表す。§ 7 は再び恩人がただ patronus と呼ばれた例が挙げられるが、もはや pater の語は伴わない。但し、これは前1世紀に属する。§ 8～10 では再び patronus の語なしに「感謝の念」が表されたエピソードが挙げられる。このあとに Externa (外国の例) が続く。この章のクライマックスとも言うべき § 5～6 では、解放奴隷の地位 (pilleus), 従って狭義のクリエンテスの地位が、恩恵を受けた者——しかも元老院議員を含むローマ市民——の状況を隠喩的に表している。これらは前3世紀後半、2世紀前半の出来事である。更に狭義のクリエンテスの地位を表す pilleus が「恩義を受けた者」の地位を隠喩的に表す例を我々は Valerius Maximus 以外の史料から若干知っているが、⁴²⁾これ又、前2世紀の前半に属する。

前197年に Q. Minucius Rufus⁴³⁾が北イタリアで戦果をあげて Albanus 山で小凱旋式を挙行了した時、彼に救済された Placentia 及び Cremona の植民者 (ローマ市民) は、pilleus を冠してこれに従った (Liv. XXXIII, 23, 6)。

次に、外国人がこれを模倣する。Bithynia の王 Prusias II 世は、前167年よりやや前に、自己の宮廷にローマの使節を迎えた時、解放奴隷の容をして (頭髮を剃り、pilleus を着用するなど)、「御覧下さい、貴方たちの解放奴隷である私は、ローマのすべてを称え、それを模倣しようと望んでおります」と言ったと伝えられる (Polyb. XXX 18, 3f. Liv. XLV 44, 19. その他の資料は Chr. Habicht, RE 23 (1957), Sp. 1111, 51f.)。そして、我々は、前166年 (SIG³ 656, 23) 以後、ギリシア人がギリシア語で、ローマの有力者を *πάτρων* と呼んだ⁴⁴⁾多くの例を知っている。

以上の例では、私的な謝恩の念が pilleus によって象徴されているのに対

し、それ以後の時代の史料に *pilleus* が現れる時には、私の見た限り、それは政治的、イデオロギー的な操作の道具として用いられている。その事を最もよく示すのは、貨幣に *pilleus* が刻される例である。即ち、前126年の C. Cassius Longinus の貨幣に刻された *pilleus* は前137年の Lex Cassia tabellaria⁴⁵⁾ による、民会での秘密投票制の導入を象徴している。前125年の M. Porcius Laeca の貨幣のそれは、leges Porciae de provocatione⁴⁶⁾ を記念している。前75年の C. Egnatius Maximus の貨幣、及び L. Farsuleius の貨幣のそれは、populares 的立場を象徴しているものと解されている。⁴⁷⁾ Dio Cass. XLVII 25, 3でも M. Brutus がカエサル暗殺を記念して、その貨幣に、自己の頭像と並んで *πίλιον* (= *pilleus*)⁴⁸⁾ を刻させた。貨幣という特殊な政治的な宣伝手段を別としても、Appian. b. civ. II 119, 499では、カエサルが暗殺された時、暗殺者の一人が、専政支配者からの解放の象徴として槍の先に *πίλος* を掲げた (*σύμβολον ἐλευθερώσεως*) と言うし、又、Suet. Nero 57, 1 及び Dio Cass. LXIII 29, 1 によれば、ローマのプレブスはネロ帝の死を祝うために *pilleus*⁴⁹⁾ を着用した。然し我々は、*pilleus* が政治の道具になる以前の時代にしばらく留まりたい。

理論上対等である筈の当事者の一方が、他方から受けた恩恵ゆえに自己が下位にある事を強調するための、この象徴行為が、その私的な、純粋な形で、前3世紀末から前2世紀前半にかけての半世紀(前217年から167年)に集中して多数の史料に現れるのは不思議である。それと並んで不思議なのは、これらの例が殆ど *imperium militiae* と結びついている事である。しかも凱旋式の場合には、*clientes* を演ずる兵士たち(Culleo の場合は元老院議員)にとって、*patronus* は未だ *imperium* を保持したままの *imperator* であった。Culleo の例は、*imperator* が *privatus* になっても *clientela* の意識が最後まで失われなかった事を示している。

ローマ古来の *clientes* と解放奴隷の *clientes* とは、起源的に同じものではないかもしれない。然し、前4世紀に既に古来の *clientes* は消滅しかかっており、代って解放奴隷が増大し始めている。⁵⁰⁾ Ap. Claudius Caecus (censor 312) の時代に解放奴隷が社会問題になっていた事は周知の通りである。P. Brunt

は、前3世紀後半に、Cisalpināを除くイタリアの全人口を400万ないし500万⁵¹⁾、うち奴隷の数は150万ないし200万とし、又ローマ市には、その全人口の3分の1、ないし4分の1にあたる約25万の奴隷がいたとも推定されているが、⁵²⁾少なくとも都会の勤勉な奴隷は僅かの年数で自由を得る事が可能であつた。⁵³⁾前3世紀後半には、もはや *clientes* は解放奴隷によって代表されていたと考える事が出来よう。従つて、*patronus—clientes* 関係の隠喩として、特に *pilleus* が用いられたのは、この時期としては極めて当然である。

いずれにせよ、前3世紀後半～前2世紀前半には、本来の自由人同士の関係が *patronus—libertus* の関係を表す *clientela* と同化されるのは、特別の事と意識されており、恩人の *pater* (自己に対して家父長権を持つもの：生物学的な意味での父親ではない) との同一視や *pilleus* 着用のような、いわば大袈裟な象徴行為を伴っている。それは、*clientela* の表象が「家」の外に適用されたのが、この時期を中心とする時代からのことであつた事を暗示しないだろうか。これに対して、前1世紀の *Metellus Pius* の例では、恩人はただ *patronus* と「呼ばれる」にすぎない。然し、何故それがその後も、本稿の冒頭に引用したような、*Saller* の指摘する三つの領域においてしか使われなかったか——どうしてそれが特に *imperium militiae* の領域に広がっていったのか——については、機会を改めて考える他ない。

7. さて、以上の考察から言いうる事は差し当り、*imperium* 保持者が最も完全な *patronus* である、と言う事、属州総督の行使する *imperium* が *technical* なものであるか *non-technical* なものであるかを当時の人が問わなかった、という事、そして、*patrocinium* が「家」からその外に拡大された、という事、この三点である。*imperator* たる大スキピオの凱旋式に *pilleus* を着して参列した元老院議員 *Culleo* の姿は、このすべてを象徴している。従つて、ローマ社会について、「一方に(いわゆる *technical* な) *imperium*、他方に *patrocinium*」という二分法、更には「法的関係、法律外的関係」と言う二分法は現実的ではない。*imperium* と *patrocinium* は対立するものではない。それは「制度」の内部にあるか外部にあるか、という問題ではなく、その意味

でローマの *patrocinium* の配置図は、人類学的なパトロネジのそれとは異なる。人類学者の間でもパトロネジの定義は極めて多様であるが、少なくともそれが「制度的」、「法的」な社会統合とは異なった次元に属するものである事は、共通の理解になっているようである。⁵⁴⁾ ある場合には、それは「制度」の薄弱さを補い、時には制度よりも有効な社会統合の機能を果たしている。然し、*imperium* は、少なくとも従来の理解では、まさにローマの「制度」の中枢にあるものであった。もし、《non-technical》な *imperium* ではない「純粹に」《technical》な *imperium* が存在する、と言う事が幻想であるならば、我々はローマの制度の中枢において *patrocinium* が機能するのを否定する事が出来ない。

ギリシア・ローマの奴隷制について夙に指摘されているところでは、古代人は、身内の者以外の外部の者の労働を用いる時には、相手の「労働」をその「人間」全体から抽象せず（例えば、人間から抽象された「労働」を時間などで量的に測定して取引の対象とせず）、むしろ、労働力として使用する人間を、人間まるごと占有してしまう（自由人の雇用は *marginal* ⁵⁵⁾ である）。それと同様に、官職に関しても、ローマ人は全き「人間」（具体的には貴族）から「公務」を抽象しない。*magistratus*（公職〔者〕）は、その人の「人間」と不離の関係にある。*magistratus* になる事によって、私人から公人へと、その座席をスッポリと変えるのではない。⁵⁶⁾ *patrocinium* が *imperium* 保持者によって、その最高の形態で表現されるのは、不思議でない。

⁵⁷⁾ 私は別稿で *patrocinium* のイデオロギー性を問題にしたが、この点については稿を改めて論ずる事にしたい。

注

- 1) in : Gellner-Waterbury, *Patrons and clients in Mediterranean societies* (1977), p. 63. 更に、同書 p. 257f. (C. H. Moore), p. 275 (E. L. Peters) 参照。
- 2) 近代語としての *patronage* の起源については、P. White, *Amicitia and the profession of poetry in Early Imperial Rome*, in: *The Journal of Roman Studies*, vol. 68 (1978), p. 78, n. 9.
- 3) R. Motomura (本村凌二), *Kodai* 2 (1991), p. 61f. に学説史の大まかなスケッチがある。——私自身も『世界歴史大事典』（平凡社）第20巻「ローマ（共和政

期)」の項(1954)以来これに深くコミットしてきた。

- 4) 人類学的方法確立以前から、少なくともローマの外国支配に関してパトロネジ概念が用いられた事は P. C. Sands, *The client princes of the Roman Empire* (1908) が示しているが、これは結論の部分 (p. 158f.) で、イギリスのインド支配に関する Lee-Warner の著書 (*Protected princes of India* [1894]・筆者未見) を援用しており、ローマの外国支配をパトロネジとみる見方が、近代帝国主義社会と一定の内的連関を持っている事を示している。
- 5) Saller, op. cit. p. 9. cf. P. White, op. cit. p. 79.
- 6) 以下, Cic. Verr. の引用にあたっては、第一部を act. pr. と、第二部の各巻はただ I, II, III, IV, V, と引用する。
- 7) Münzer, *RE* (=Pauly-Wissowa-Kroll-Mittelhaus-Ziegler, *Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*) 4(1901), Art. Cornelius Sp. 1389, Nr. 228: 彼の父 (*RE* Art. Cornelius Nr. 230) は Marcellus 家から出て Cornelius Lentulus 家の養子となった。
- 8) II 156~157 Halaesa, Catina, Tyndaris, Henna, Herbita, Agyrium, Netum, Segesta; enumerare omnis non est necesse. 160 Tauromenium, Tyndaris, Leontini, 161~164 Centuripa. 更に II 137. 141. 146. 148f. 165. 168。——木庭顕 (6) (下記, 注12を参照) p. 616が示唆するように、これらの soteria の拠点の特殊性は改めて考えなければならない。
- 9) Att. XIV, 12, 1 (前44年4月) Scis quam diligam Siculos et quam illam clientelam honestam iudicem. Scaur. 26. Brut. 319. cf. Div. in Caec. 2. また, Att. II 1, 5 (前60年6月) では, P. Clodius の口から、キケロをシチリア人の patronus とする意味の発言がなされている。
- 10) M. Gelzer, *Cicero, ein biographischer Versuch* (1969), S. 42: die tadellose Haltung der Richter im Verresprozess. 但し, cf. Ps.-Ascon. 205.
- 11) M. Gelzer, op. cit. S. 44.
- 12) 以下, ウェレス着任当初の「十分の一税」に関する二つの告示の復原について、私は数年前、故・村川堅太郎教授を中心とする「古代史の会」で研究成果を発表したが、これは今のところ印刷されていない。——現在我々はこの演説に関して木庭顕の次の重要な論文を持っている。「“in Verrem” と “de re publica”」(1), 『国家学会雑誌』第95巻(1982), 第3・4号。同(2), 同誌, 第96巻(1983), 第3・4号。同(3), 同誌, 第96巻(1983), 第9・10号。同(4), 同誌, 第97巻(1984), 第1・2号, 同(5), 同誌, 第103巻(1990), 第7・8号。同(6), 同誌, 第103巻(1990), 第9・10号。本稿では最後の2篇を木庭顕(5), 木庭顕(6)として引用。
- 13) この言葉は, primum ... audite (まず……を聞いてほしい) とも取れるし, primum edictum ... (第一の edictum を……) とも解せる。

- 14) III 36によれば、この告示に反抗する Q. Septicius はその収穫を imbri frumentum corrumpi in area patiebatur と言う。してみると、告示⑥は前71年の、遅くとも7月初めには出されたであろう。ちなみに、Drumann-Groebe, *Geschichte Roms* usw. III 2. Aufl. (1906), 781によれば、前65年においてローマ暦の8月1日はユリウス暦の7月30日であるから、この暦法上の差は殆ど無視できる。
- 15) quod lege Hieronica numerus aratorum quotannis apud magistratus publice subscribitur.
- 16) なお木庭顕 (5), p. 446は、III 112 (jugera professi sunt aratores omnes imperio atque instituto tuo) を根拠として、この条項がウェレスの創始にかかるものであるとする。この個所は、ウェレスが lex Hieronica を全面的に廃棄し、それに代る全く新しい非道な告示を発表した (II 33. III 15~20. 24 et al.), そしてそれがウェレスの instituta と edicta によってなされた (III 24 novis institutis et edictis, tota Hieronica lege ... reiecta ac repudiata. 43. 150) と言うキケロの一貫した主張を繰り返したものであるが、果たして lex Hieronica がウェレスによって完全に破棄されたか否かについては、私は判断を留保したい。少なくとも III 112で、ウェレスがこれらの告示を彼の imperium と institutum によって発表した、と言う事は、それが tralaticia なものである事を排除しない (III 15: instituta omnium = 歴代総督のそれぞれの institutum が edicta tralaticia を形成する)。
- 17) Oehler, *RE* 4, 356f. Art. Cohors amicorum. Seeck, Art. Comites 623f. F. de Martino, *Storia della costituzione romana* II 2. ed. (1973), p. 404 seg. — II 34では、Q. Mucius Scaevola が前97年に Asia の proconsul として cohors を持った事が示唆されている。
- 18) III 22 omnium qui decumani vocabantur princeps. 32 decumani hoc est Apronius. III 23では彼は fanorum expilationes に関与したと言うが、具体例は伝えられない。
- 19) III 58. 200 Aproni regnum. 115 regie. 228 dominatio. 23 dominus. 31 tyrannus. 115 tyrannice.
- 20) Aeschrio と Cleomenes がシラクサの元老院議員である事は II 47. Theomastus は高位の神官職についた: II 126~127. Dionysodorus の身分については、他の3人と共にシラクサの元老院にウェレス父子の像を飾るように命ぜられた事 (II 52) から想像しうるのみである。
- 21) 彼の妻 Tertia は役者の娘で、楽師のもとから連れ去られてきた者であるから (III 78. 79. 83. V 31. 81), 彼自身さほど高い身分であったとは考えられない。
- 22) 吉村忠典「属州クリエンテーラと補助軍」(太田秀通他編, 『古代史講座』 V (1962), VII (1963)所収) = *Historia, Zeitschrift für Alte Geschichte*, 10 (1961), S. 473f.

- 23) Thermae の Sthenius (II 90~91)。Halaesa の Dio (II 19. I 27)。Agyrium の Sosippus と Philocrates 兄弟 (II 25~27)。Bidis の Epicrates (II 56)。Centuripa の Heraclius (II 66~67)。Lilybaeum の Agonis (Div. in Caec. 56)。
- 24) 拙稿 (1984)=Zum römischen *libertas*-Begriff in der Aussenpolitik im zweiten Jahrhundert vor Chr., in: *American Journal of Ancient History*, vol. 9 (1984), lf.
- 25) 拙稿 (1984), p. 5f.
- 26) 拙稿 (1986) = 「条約締結国としてのメッサナ」 (片岡輝夫他著『古代ローマ法研究と歴史諸科学』所収) 113頁 = *Hermes* 120 (1992), S. 334f.
- 27) Th. Mommsen, *Römisches Staatsrecht* II 3. Aufl. (1877), S. 840. 以下 Mommsen と略す。
- 28) A. von Premerstein, *Vom Werden und Wesen des Prinzipats* (1937), S. 225. 234.
- 29) F. de Martino, op. cit. I 2. ed. (1972) p. 416 il concetto dell' *imperium* ... era un forte potere centrale, atto a dominare sulle antiche genti che avevano costituito il comune.
- 30) 例えば前186年の Sc. de Bacchanalibus (ILS 18=FIRA No. 30. Liv. XXXIX 14, 3f. 18, 7f. et al. 拙著『支配の天才ローマ人』186頁), 前193年の lex Sempronia de pecunia credita (Rotondi, p. 271, 拙著, 186頁), 前170年の Sc. de Thisbensibus (FIRA I No. 31=Sherk, RDGE No. 2, 拙著, 203頁), 前164年の Sc. de Sarapeo Deli insulae (SIG³ 664=Sherk, No. 5, 拙著, 217頁), その他。又, 個々の政務官 (代理官) の内政干渉についても (例えばフラミニヌスのナビス戦争, 等), 拙著に挙げた多くの例を参照。更に, 例えば Cic. ad Q. fr. I 1, 25 (前59年にキケロよりアジア州の総督たる弟に宛てた書簡) nullas esse in oppidis seditiones, nullas discordias; provideri abs te ut civitates optimatium consiliis administrentur.
- 31) W. Kunkel. *Untersuchungen zur Entwicklung des römischen Kriminalverfahrens in vorsullanischer Zeit* (1962), S. 140, Anm. 479.
- 32) F. de Martino, loc. cit. p. 418 seg. は *imperium militiae* 保持者の *coercitio* 権, *iudicatio* 権の対象として, ローマ市民たる兵士と並んで *popolazioni nemiche* を挙げるが, 引用されている史料 (Liv. XXVIII 24, 10. Polyb. VI 37, 8 [これについては Walbank の註を参照]) は戦陣での出来事である。戦陣で *nemiche* な外人に報復を加える事は当然である。
- 33) Sulla の lex Cornelia maiestatis は in regnum iniussu populi Romani aut senatus accedere を禁じているが (Cic. Pis. 50. Kunkel, *RE* 24 (1963), Sp. 743), 当時のローマ人には *civitates* と *regna* とを何等かの意味で区別する意識

があったのであろうか。

- 34) P. A. Brunt, *Roman imperial themes* (1990), p. 493f. は, *crimen repetundarum* が少なくとも Sulla の *lex Cornelia repetundarum* 以後刑事法的なものになった, と論じている。
- 35) W. Kunkel, *Magistratische Gewalt und Senatsheerrschaft*, ANRW I. 2 (1972), S. 13. — Livius における *imperium*, *imperare* の «non-technical» な用法については拙稿 (1984) に引用した多数の例を参照。
- 36) Mommsen, I 164, 2. 612, 1. L. Lange, *Römische Altertümer* I 3. Aufl. (1876), S. 747.
- 37) まさにこの Verr. I 81から Lampsakos は *civitas libera* だと想像されている: R. Bernhardt, *Imperium und Eleutheria*, Diss. Hamburg (1971), S. 126, Anm. 195. いずれにせよ, 広義では「自由」である。
- 38) 史料は, F. Münzer, *RE* 6 (1909), Art. Fabius Nr. 116, Spp. 1822. 1828, 60f. *RE* 15 (1932), Art. Minucius Nr. 52, Sp. 1961, 48f.
- 39) F. Münzer, *RE* 5A (1934), Art. Terentius Nr. 43. F. Cassola, *I gruppi politici romani nel III secolo a. C.* (1962), p. 390f. 吉村『支配の天才ローマ人』53頁。
- 40) 5 auctori enim libertatis suae tamquam patrono accepti beneficii confessionem, spectante populo Romano, merito reddidit. cf. Liv. XXX 45, 5. XXXVIII 55, 2. per. 30. Quintilian. declam. 9, 20. Plut. mor. 196 E. Dio Cass. XVII frg. 57, 86.
- 41) Valerius Maximus の典拠については R. Helm, *RE* 8A (1955), Art. Valerius Nr. 239, Sp. 102f. とくに Val. Max. と Cicero・Livius の関係については, Sp. 105f. Plutarchos が Val. Max. を使用していない事については, Sp. 114. — いずれにせよ, Val. Max. の叙述は, 細かい点で不正確な事があっても, 肝腎な点は然るべき典拠によっている。
- 42) なお, 古代ラテン語著作家における *pilleus*, *pilleatus* とその変化形の使用箇所, 及び Appian., Dio Cass., Diod. Sic. (XXI~XL), Plut., Polyb. における *πίλος*, *πιλίον* とその変化形の使用箇所については島田誠氏 (東洋大学) を煩わし, The Packard Humanities Institute (California) の CD ROM series #5.3, 及び University of California Irvine の Thesaurus Linguae Graecae の CD ROM のデータベースで検索して頂いた。又, 史料の利用にあたっては秋山学氏 (東京大学大学院西洋古典学研究室助手) に大変お世話になった。この場を借りて, 両氏に感謝の意を表したい。
- 43) F. Münzer, *RE* 15 (1932), Art. Minucius Nr. 55. Sp. 1963f.
- 44) SIG, OGIS などの索引 s. v. *πάτρων* 参照。
- 45) M. H. Crawford, *Roman Republican Coinage* I (1974), p. 290.

- 46) M. H. Crawford, *op. cit.* p. 293.
- 47) M. H. Crawford, *op. cit.* p. 405. 406.
- 48) cf. M. H. Crawford, *op. cit.* II (1974), p. 741 & plate No. 508/3.
- 49) フランス革命の際にサンキュロットが冠った *bonnet phrygien* は、これらの先例を受け継ぐものであろうか。
- 50) L. R. Taylor, *The voting districts of the Roman Republic* (1960), p. 133. N. Rouland, *Pouvoir politique et dépendance personnelle dans l'antiquité romaine* (1979), pp. 159. 205f.
- 51) P. A. Brunt, *Italian manpower 225 B.C.-A.D. 14* (1987), pp. 60. 121.
- 52) N. Brockmeyer, *Antike Sklaverei* (1979), SS. 159. 164.
- 53) 奴隷自身の労働による奴隷価格の償却については、N. Brockmeyer, *op. cit.* S. 321, Anm. 17 を参照。
- 54) 本稿の注1に引用した書物の中で、編者 E. Gellner (p. 1~4) は、「婚姻関係に基づく政治組織はパトロネジの社会ではない。……封建制もパトロネジではない。封臣の主君に対する忠誠は overtly committed であり、その論理は codify され formalise されてる。……これに対してパトロネジは pays légal のものではなく pays réel のものである。…パトロネジは official なモラルではない事を弁えている。封建制は一社会の Great Tradition を形成しうるが、パトロネジはそうではない(封建制は patronage manqué cf. K. Brown [p. 315])。パトロネジは公式に認められ宣言された社会倫理の外側にある」と論ずる。今一人の編者 J. Waterbury (p. 336) も、パトロネジは弱者が特別に弱く、強者が特別に強い社会、そしてそれをカヴァーする法廷、警察、ゲームのルールなどが充分かつ legitimate に機能していない社会に生じ易い、と考える。cf. p. 260 (C. H. Moore): 政府が大きいほど、人類学者の言うパトロネジの役割が小さい事の例。その他 p. 22f. [J. Scott], p. 63 [A. Zuckerman], p. 314 [K. Brown] などを参照。
- 55) M. I. Finley, *Ancient slavery and modern ideology* (1980), p. 67f. フィンレイ編『西洋古代の奴隷制』(1970) 所収のフィンレイ論文、桑原洋訳「ギリシア文化は奴隷労働を土台としていたか」(原文は1959発行) 87頁、および訳者註。
- 56) なお、一つのアナロジーとして、岸本美緒「明清時代の郷紳」(柴田他編『権威と権力』、シリーズ・世界史への問い、第7巻〔1990〕所収)、60頁を参照(同様に、P. Veyne, *Le pain et le cirque* [1976] p. 503, n. 92)。
- 57) 吉村忠典「パトロネジに関する若干の考察」(長谷川博隆編『古典古代とパトロネジ』、名古屋大学出版会、1992)。この論集は本稿の校正の段階で発行されたが、この中で浦野聡氏(240頁)は、「近代的観点から、合法的なものと非合法的なもの、制度と制度外的なものを対立的に捉えて、それを古代社会に適用しようとする時代錯誤的発想」を批判しておられる。